

女性の新卒看護師の看護技術等と学歴との関係 についての事例研究

—看護職養成の大学化に注目して—

A Case Study on the Relation between New Graduate Nurses' Skills and their Educational Backgrounds

—Focusing on Collegization of Nursing Education—

日下田岳史 HIGETA, Takeshi (東京大学大学院教育学研究科博士課程, 日本学術振興会特別研究員)

看護職養成の大学化が進むなか、その成果の一部を解明するため、新卒看護師の看護技術等と学歴との関連を分析した。小標本データに基づくブール代数分析等を行った結果、看護技術等の自己評価について、①大卒学歴は唯一の原因条件とは限らないこと、②リアリティ・ショックの影響がうかがわれることがわかった。

キーワード 看護職養成の大学化, 学歴, ブール代数分析



1 目的

わが国では4年制大学(以下、大学)の看護学部の増加が著しく(日本看護協会出版会『看護関係統計資料集』各年度)、新卒看護師の高学歴化が進んでいる。このような看護職養成の大学化は、それに見合う成果を取めているといえるだろうか。本稿は、新卒看護師が1年間で修得が期待される看護技術等の自己評価に焦点を当て、新卒看護師の学歴と当該看護技術等との関係を明らかにする。このことを通じて、看護職養成の大学化の意味を引き出すことに、本稿のねらいがある。

看護師養成機関には、大学以外の学校種も数多く存在している。保健師助産師看護師学校養成所指定規則(以下、指定規則)が、看護学校や大学等の看護師養成機関間の教育内容の整合性をもたせる役割を担うもの(井本, 2012: 33)として存在している。そして、看護師の業務は、保健師助産師看護師法に規定されている。

このことを踏まえると、新卒看護師の看護技術等に学歴差があるとすれば、看護基礎教育に積み上げられた大学教育の「効果」が、そこに見出される可能性が出てくる。なぜなら、指定規則が定める看護基礎教育や、仕事上の経験による影響は、ある程度コントロールされているとみなせるためである。本稿は、大学教育の「効果」の意味づけをめぐる事例研究という側面をもつものということもできる。

2 方法

調査実施の手続き

2012年4月に採用の新卒看護師およびプリセプター(新人指導を担う先輩看護師)に対して、①属性的項目、②看護学生時の経験、行動および当時の看護技術等の自己評価、③現在の看護技術等の自己評価等、④勤務時間外の行動を主に尋ねる質問紙調査(2012年9月、12月および13年3月の3時点で実施する縦

断調査)を計画した。この質問紙調査によって測定される看護技術等は主に、厚生労働省(2011)「新人看護職員研修ガイドライン」に基づいている。当該ガイドラインは、新卒看護師が1年間で修得することが期待される項目を具体的に例示している。

現在は、私の所属機関における倫理審査を経て、機関として調査実施への承諾を得られた3病院において、縦断調査を実施中である。目下、2012年9月実施分から得られたデータについて分析可能である。このデータに基づき、新卒看護師の看護技術等の自己評価と学歴との関連について、確認を行う。ただし、協力が得られた3病院のうち、本稿の分析対象はA病院に限定する。

なお、質問紙調査の実施に先立ち、調査対象者に調査の目的を文書で説明し、研究参加承諾書の提出者に対して質問紙を配付した。社会調査では、質問紙の配付に先立ち承諾書の提出を依頼することは、必ずしも一般的ではない。しかし、本件調査の場合、医療従事者を調査対象とすることを踏まえ、このような慎重な手続きを採った。実際に回収された、A病院の新卒看護師の調査票は16票(回収率27%)、分析対象となる女性の新卒看護師の調査票(欠測のあるケースは除外)は12票である。¹⁾

❖ 分析手法

看護技術等と学歴との関連を確認する方法として、学歴を独立変数、順序尺度変数として計測された看護技術等に係る諸項目を従属変数とする各クロス集計表にマン・ホイットニーのU検定(正確確率検定)を適用のうえ、従属変数の代表値の学歴差を確認する。有意水準は10%とする。

さらに、学歴以外の変数も考慮して分析を

行うほうが望ましいだろう。しかし、このような小標本の場合、多変量解析の適用は困難である。そこで、各変数を2値変数に縮約して、プール代数分析³⁾を行う。プール代数分析には、検定ができない等の短所があるが、小標本に対して適用可能であるばかりでなく、複雑な交互作用の記述まで可能となるという利点がある(太郎丸・田中, 1997:172)。後者の指摘は、しばしば重要である。なぜなら、「個々の独立変数を分離してそれぞれの影響力を測るというやりかたは、結合的・多元的因果関係の可能性そのものを忌避させるような方向へわれわれの思考を導きやすい」(鹿又ほか編著, 2001:53)ためである。プール代数分析は、複雑な関係を積極的に取り込み、その関係から有意な解釈を引き出そうとする研究に適した手法だといえる。

これらの計量的分析手法は、所期の目的に沿い、本稿が扱う小標本データの特性を活かしながら、知見を最大限引き出すためには有効な方法だと判断した。

3 結 果

❖ クロス集計分析から学歴差がみられた看護技術等

第2節第2項で述べた方法に基づきクロス集計分析を行ったところ、次の特徴が確認された。

第一に、勤務時間外に看護関係の専門書や雑誌を読むという自己学習の頻度は、大卒のほうが有意に高い($p=.072$)。

第二に、現在の看護技術のいくつかの項目について統計的に有意な学歴差が見出されており、当該項目は常に大卒のほうが自己評価が高い。しかし、非大卒が当該項目について、

「修得できていない」と自己評価する傾向にあるとは限らない。ここで述べているのは自己評価の相対的な高低であることに、留意が必要である。

ただし、看護実践の管理的側面については、大卒が修得していると自己評価しているのに対して、非大卒は修得していないと自己評価するというように、学歴ごとに自己評価の方向が分かれる傾向がみられた。具体的には、薬剤を適切に請求・受領・保管する ($p=.006$)、規定に沿って適切に医療機器・器具を取り扱う ($p=.038$)、患者の負担を考慮し、物品を適切に使用する ($p=.053$) の各項目である。ガイドラインには「看護実践における管理的側面については、それぞれの科学的・⁴法的根拠を⁴理解し、チーム医療における自らの役割を認識した上で実施する必要がある」(厚生労働省, 2011: 12) と謳われている。当該項目の自己評価は、勤務時間外の自己学習頻度とも関連があるということが考えられる。

🔍 看護実践の管理的側面の自己評価の高さへの原因条件の分析——ブール代数分析から

ここでは、前項に挙げた看護実践の管理的側面の自己評価を2値(「修得している」「修得していない」)に縮約した変数を従属変数 T とする。「どちらとも言えない」は、保守的な基準を想定して、「修得していない」に含める。他の順序尺度変数についても、同様の基準を想定して、2値変数化する。

独立変数は、大卒ダミー (A)、学生時に看護関係の専門書や雑誌を読んだ経験 (B) および現在勤務時間外に看護関係の専門書や雑誌を読む経験 (C) である。

ブール代数分析ではまず、真理表を作成する。真理表とは、分析しようとするデータを

表1 真理表

行番号	独立変数			従属変数	事例数	
	A	B	C	T	(0)	(1)
1	1	1	1	1	0	1
2	1	1	0			
3	1	0	1	1	0	5
4	1	0	0	1	0	1
5	0	1	1	0	1	0
6	0	1	0	1	0	1
7	0	0	1			
8	0	0	0	0	3	0

原因条件(独立変数)、出力結果(従属変数)に分けて、それぞれを論理変数の値で表すものであり、論理変数には当該条件があてはまっていれば1、あてはまっていなければ0を入れる(与謝野ほか編, 2006: 135-36)。表1は、従属変数 T を「薬剤を適切に請求・受領・保管する」としたときに得られる真理表である。⁵

真理表から、標準積和形と呼ばれる論理式を導出する(①式)。これは、各行の独立変数を論理積で表し、さらにその論理積を和で示すものである(鹿又ほか編著, 2001: 25)。ここでいう論理積とは、独立変数の組合せである。独立変数が1をとるときを大文字で、0をとるときを小文字で表す。標準積和形の各項は、最小項と呼ばれている。なお、従属変数が観測されない2行目および7行目は、 $T=0$ と仮定しておく。

$$T = ABC + Abc + AbC + aBc \quad \text{①}$$

続いて、①式を、ブール代数の公式に基づき簡単化する。公式のなかでとくに重要なものは最小化定理であり、これは次のような考え方である。たとえば、 ABC および AbC に着目するとき、「この1組の対では、1つだけ条件が異なっているが、他の条件は同じである。この対では同じ結果現象が起きている

表2 看護実践の管理的側面の自己評価の高さへの原因条件

	T1: 薬剤を適切に請求・受領・保管する	T2: 規定に沿って適切に医療機器・器具を取り扱う	T3: 患者の負担を考慮し、物品を適切に使用する
【仮定Ⅰ】空白行について、 $T=0$	$T1=A(b+C)+aBc$	$T2=AC+aBc$	$T3=AbC$
【仮定Ⅱ】空白行について、 $A=1 \Rightarrow T=1$	$T1=A+Bc$	$T2=A(B+C)+Bc$	$T3=A(Bc+bC)$

A: 大卒ダミー, B: 学生時に看護関係の専門書や雑誌を読んだ経験ありダミー, C: 現在勤務時間外に看護関係の専門書や雑誌を読む経験ありダミー。

ので、異なっている条件は結果に相違をもたらしていない。したがって、この条件は結果の相違をもたらす原因条件と考えなくてもよい」(同上:27)。単純化の結果、もしも①式から大卒ダミー(A)が消去された場合、学歴は従属変数の相違をもたらす原因条件ではないことになる。

最小化定理の適用により、①式は②式のように単純化される。これ以上単純化できない論理式の各項は、主項と呼ばれている。さらに②式は、Aについて括り出すことで、③式の形に変形することができる。

$$T=Ab+AC+aBc \quad \text{②}$$

$$T=A(b+C)+aBc \quad \text{③}$$

以上の手続きに従い、前項に挙げた各変数を従属変数とする論理式の最小積和形をそれぞれ導出した。

ただし、③式は、真理表の、従属変数が観測されない空白行について、 $T=0$ と仮定したことに依拠している(仮定Ⅰ)。仮定を変えることで結果がどれくらい変化するか、確認しておく必要がある。そこで、大卒学歴が従属変数の生起に対して「効果」があると考えて、真理表の2行目について $T=1$ 、7行目について $T=0$ との仮定を別途導入のうえ、最小積和形を導出した(仮定Ⅱ)。これらの諸手続きの結果をまとめたものが、表2である。

真理表から導出された標準積和形の単純化を経た後も、仮定ⅠおよびⅡの双方において、

大卒ダミー(A)は論理式から消去されない。ただし、学歴が、従属変数の生起に至る唯一の経路であるわけではない。T3についてはAが必須だが、T1およびT2についてはAがなくてもよい場合がある。

この他、BcまたはbCという組合せがあることも、注目に値する。学生時代の専門書等の読書頻度は高く(B)、現在の読書頻度は低い(c)、またはその逆という組合せ(自己学習頻度のねじれ現象)が、各項目への自己評価の高さへの経路となることがある。

4 結論と課題

女性の新卒看護師を事例に、小標本という特性を踏まえ、看護技術等の自己評価と学歴との関連について、分析を行った。その結果、採用初年次の9月において、大卒学歴は、看護技術等の自己評価を規定する唯一の原因条件とは限らないということが明らかとなった。看護技術等の自己評価の高さに至る経路として、大卒学歴は必須の経路であるわけではなく、他の経路も存在している。看護職養成の大学化が進むなか、1年以内に修得が期待される事項について、新卒看護師の高学歴化、すなわち被教育期間の延長が直ちに役立つとはいえない可能性が提起されたといえる。

また、過去の学習頻度と現在の学習頻度との逆転が、自己評価の高さに至る場合がある

という、ねじれ現象とでも呼ぶべき事例が観察された。このねじれ現象を解釈するためには、リアリティ・ショックを考慮するべきだろう。「業務上のミスにより自信をなくした」ことがいつも、またはよくあった者は、臨地実習時は0%なのに対して、9月の調査時は69.3%に上っている。

リアリティ・ショックは、学生時代または現在の自己学習頻度の回答に下方バイアスを与えている可能性がある。学生時代にもっと勉強しておけばよかった、あるいは、今の自分には勉強が不足しているといった感覚から派生する下方バイアスのことである。バイアスの程度の推定は難しいとしても、バイアスの存在を分析結果の解釈に活かすことは可能である。ねじれ現象は、新卒看護師のリアリティ・ショックの反映として解釈できる可能性を指摘しておきたい。

今後は、縦断調査データを用いながら、自己学習頻度の変化、および看護技術等の自己評価の変化について分析を深め、本稿から得られた知見について検証を加えていく予定である。

[付記] 本稿は、科学研究費補助金基盤研究(B)「専門職養成カリキュラムをめぐるステークホルダーの合意形成に関する実証的研究」(研究代表者 橋本鉦市)の成果の一部である。

注

- ・1 回収率が低く、得られたサンプルには偏りがあると推測せざるを得ない。承諾書に住所および氏名を記入すること等に忌避感をもつ人がいることは想像に難くないが、サンプルの偏りの内容をつまびらかにすることは難しい。本稿の知見の一般性は、今後の研究蓄積を待ってから評価されると考えられる。
- ・2 「十分修得している」「だいたい修得している」「どちらとも言えない」「あまり修得していない」「ほとんど修得していない」の5段階で測定された変数である。
- ・3 ブール代数分析は、多値変数にも適用できる

(太郎丸・田中, 1997)。しかし、過度な複雑化を回避するために、多値変数の2値変数化を行った。2値変数化の際、本来1つの変数を2つの変数に分割すると大きな問題が生じる(同上)ため、第3節第2項に示す変数加工の手続きを採った。

- ・4 強調箇所は引用者による。
- ・5 従属変数によっては、矛盾する出力結果もつ行が表れうる。その場合、区切り値が75%以上の場合に従属変数を1としている。区切り値とは、当該行の全事例数に対して「1」をとる事例数の割合として設定した任意の値のことである。与謝野ほか編(2006:142)は区切り値を70%としていることを参考に、本稿ではやや保守的な区切り値を設定した。
- ・6 主項選択表を用いて確認したところ、②式に冗長な項はなかった。主項選択表に基づく論理式の単純化については、鹿又ほか編著(2001:28-29)を参照のこと。
- ・7 この確認手続きは、真理表の空白行に由来する分析結果の不確実性の評価に相当する。

文献

- 井本佳宏, 2012, 「看護師養成の大学化の進展とその課題」橋本鉦市編『日本の専門職コンピテンシー抽出と質保証システム構築のための横断的分析』2009年~2011年度科学研究費補助金・挑戦的萌芽研究最終報告, 32-40。
- 鹿又伸夫・野宮大志郎・長谷川計二編著, 2001, 『質的比較分析』ミネルヴァ書房。
- 厚生労働省, 2011, 「新人看護職員研修ガイドライン」『「新人看護職員研修に関する検討会」報告書』別添資料。
- 日本看護協会出版会, 『看護関係統計資料集』各年度。
- 太郎丸博・田中重人, 1997, 「多値変数を含むブール代数分析」『大阪大学人間科学部紀要』23:167-83。
- 与謝野有紀・栗田宣義・高田洋・間淵領吾・安田雪編, 2006, 『社会の見方, 測り方——計量社会学への招待』勁草書房。



人文科学系の卒業論文と学生の成長感

——学習院大学文学部における事例研究——

A Case Study of Undergraduates Thesis and Students' Self-evaluation in Humanities' Program

中世古貴彦 NAKASEKO, Takahiko (独立行政法人国立美術館本部事務局職員)

卒業論文は人文科学系の学士課程教育において広く授業科目として配当されているが、学生の成長にどのような影響を与えるのか必ずしも十分に解明されていない。本稿では、教育の受け手である学生が文学部の卒業論文への取組みを通じてどのように成長感を高めているのかについて検証を試みる。

キーワード 卒業論文、人文科学系の学士課程教育、学生調査

1 本研究の背景

大学教育の質保証への関心が高まっている。「学士課程教育の構築に向けて（答申）」は、学士課程教育の改善方法の1つとして「在学中の学習成果を証明する機会を設け、その集大成を評価する取組」を促している。なかでも、卒業論文等の工夫改善や新規実施をとくに例示（中央教育審議会、2008：27）していることは、卒業論文を重視している人文科学系の学士課程教育にとって重要な指摘であると考えられる。

大学教育の質保証に関する研究として、学生調査の分析等によってカレッジ・インパクトの検証を試みる研究が多数存在する¹。しかし、それらは初年次教育を含む授業等や学生自身の属性やエンゲージメント等に注目するものが多く、卒業論文については明らかにされていない点が少なくない。

また、教育内容が比較的標準化されているとされる工学系の分野では、男性ホワイトカ

ラーを対象に在学時の学習と卒業後の状況とのレリバンスという観点から大学教育の効用を検証した先行研究が存在するが、卒業論文に主たる関心があるわけではない²。一方で、いわゆる文系分野においては、教育内容の標準化があまり進んでいないとされることもあっても、卒業論文や学習の成果に関する実証的な研究はあまりみられない³。

2 本稿の目的

以上のような状況もあり、人文科学系の学士課程教育、とくに卒業論文に焦点を当てた検証が求められているといえる。本稿では、学習院大学文学部で行われた卒業論文を含めたカリキュラムの検証を目的とする調査を用い、卒業論文が学生の成長感に及ぼす影響⁴を分析する。

なお、本稿で学生の主観的な評価を使用している点について、予め説明しておきたい。本稿の目的は、卒業論文への取組みと学習成果との関連の検証と換言できる。それならば、

卒業時点で様々な知識や能力がどの程度身についていたかを学習成果と捉えるのが自然である。しかしながら、大学教育をとおして身につくと考えられる知識や能力の獲得度合を客観的に測定することは容易ではない。また、たとえばGPAや卒業論文に対する教員の評定といった他者からの評価を学習成果の代理変数とした場合にも、それらが適切に標準化されているとは限らない。これらの問題点を踏まえ、本稿では獲得した知識や能力に対する学生の自己評価、言い換えれば卒業時の成長感を（主観的な回答に依拠することによる限界はあるが）学習成果の代理変数として用いている。

3 学習院大学文学部の卒業論文等に関する調査

本稿で用いるのは、2012年1月に学習院大学文学部で卒業論文・卒業研究（以下、「卒業論文」）を経験した学生を対象にした質問紙調査（回収率93.5%、回答数603件）のデータである。⁵ 学習院大学は首都圏に立地する私立大学で、文学部は哲学、史学、外国文学等の学科で構成され、人文科学の幅広い領域をカバーしている。本調査は、当該学部最終学年の学生のうち卒業論文を提出した者（645人）を対象とした事実上の悉皆調査であった。調査票の作成には当該学部教員も一部参加し、調査票の配付・回収にも学部の全面的な協力を得て実施した。

集計結果を簡潔に紹介すると、回答者における女子学生の割合は、在校生における割合とほぼ同じ7割強である。8割以上の学生が現在の学科を希望して入学したと回答しており、⁶ 全体的に授業に意欲的に取り組む学生が多い。8割前後の学生が「授業で課されたレポート等はしっかり準備して書いた」や「授

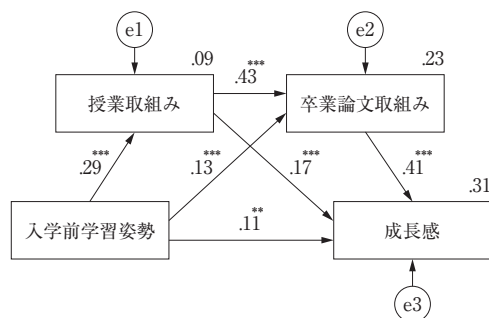
業を通して自分なりの関心を形成していった」に（とても+やや）あてはまると回答している。また約9割の学生が、卒業論文に関して教員に指導を受ける機会は十分あり、卒業論文の執筆に（とても+やや）真剣に取り組んだと答えている。一方、卒業論文の出来に（とても+やや）満足している学生と（あまり+全く）満足していない学生の割合はほぼ同じであり、自制的に自己評価をしている面もうかがえる。項目にもよるが概ね7割強から9割弱の学生が、大学生生活を通じて様々な知識や能力が（かなり+やや）身についたと答えており、卒業後の進路について9割弱が（とても+やや）納得している。卒業を控えての昂揚感があるのかもしれないが、多くの学生は所属学科の教育を肯定的に評価していると考えられる。

4 卒業論文への取組みと学生の成長感

卒業時の成長感との関連が想定される諸要因を統制する必要があるが、限られた紙幅でそれらを網羅することは難しい。できるだけ解釈しやすく、かつとくに重要な要因は押さえたモデルを検討した結果、インプット要因である入学前学習姿勢、卒業論文に先行する学習経験である授業取組み、学士課程教育の終盤の学習経験である卒業論文取組みのそれぞれが、いわばアウトプットである成長感にそれぞれどの程度影響するのかというモデルを採用した。これらの変数間に存在する時間的・論理的な順序を加味した分析を行うため、入学前学習姿勢以外は合成変数を作成したうえで、⁷ パス解析を行った。なお、卒業論文に代えて卒業翻訳を選択できる外国文学系の1学科は分析対象から除外した。⁸ 欠損値のあるサンプルを除いた各変数の記述統計量は表1

表 1 使用した変数の記述統計量

	度 数	最小値	最大値	平均値	標準偏差	α 係数
入学前学習姿勢	516	1	4	2.78	0.78	—
授業取組み	516	3	12	9.19	1.67	0.709
卒業論文取組み	516	13	32	24.02	3.55	0.739
成長感	516	11	36	27.15	3.73	0.773



注) $n=516$, ***は0.1%水準(両側)で有意, **は1%水準(両側)で有意であることを示す。矢印の隣の数字はパス係数, 変数の右肩の数字は決定係数。

図 1 パス解析の結果

のとおりである。

パス解析の結果は図1のとおりで、すべてのパスが有意な正の相関を示した。まず、入学前学習姿勢が良好な者は、授業にも前向きで(パス係数は.29)、それほど顕著ではないが卒業論文にも真面目に取り組む(.13)、卒業時に一定の成長を感じている(.11)ことが読み取れる。自律的に学習を行う習慣が身についていた学生は、やはり大学入学後も伸びやすいのであろう。次に、授業取組みからのパスに着目すると、授業に熱心に取り組む者は、卒業論文でも手を抜かず(.43)、卒業時の成長感も高い(.17)。授業をとおして卒業論文につながりそうなテーマへの関心を深めたり、執筆に必要な基礎力を養ったりしているものと考えられる。最後に、卒業論文取組みから成長感へのパス係数の値(.41)が比較的大きく、入学前学習姿勢や授業取組みの影響を統制してもなお、卒業論文へ熱心に取り

組むことが学生の成長感をいっそう高めていることを示している。

詳細は割愛するが、各変数の標準化した総合効果、直接効果、間接効果を計算すると、卒業論文取組みの総合効果(または直接効果)が他よりも大きめであることがわかる。また、入学前学習姿勢や授業取組みにおいては間接効果の割合が大きく、これらが成長感に十分寄与するためには、卒業論文取組みを介する必要があることがうかがえる。

卒業論文取組みが全体的な成長感を押し上げるとしても、とくにどのような観点で効果があるのか、あるいはないのかも確認する必要がある。表2は、成長感の内訳である個々の変数を最終的な被説明変数とした場合の各説明変数の標準化総合効果である。紙幅の都合で一部を取り上げるだけにとどめるが、たとえば「他者と協力してものごとを進める力」に対しては、卒業論文取組みだけでなく、授業取組みもほとんど寄与していない。このような能力の育成は、当該学部の(正課)教育の課題なのかもしれない。観点別の分析結果を各学科のカリキュラムや教員の指導方針と照らし合わせ、狙いどおりの効果が(少なくとも学生の自己評価で)得られたのか検証が必要と思われる。

5 まとめと今後の課題

分析結果は、知識や能力の観点によって若干の違いがあるものの、卒業論文への取組み

表2 知識や能力の自己評価に対する各説明変数の標準化総合効果

被説明変数	入学前学習姿勢	授業取組み	卒業論文取組み
専門分野の知識	0.160	0.407	0.285
専門分野以外の幅広い知識	0.158	0.283	0.145
常識にとらわれることなく批判的に考える力	0.120	0.251	0.231
他者と協力してものごとを進める力	0.148	0.042	0.085
自分の考えを他者に文章で伝える力	0.138	0.224	0.436
自分の考えを他者に口頭で伝える力	0.199	0.138	0.230
自分の適性や能力を把握する力	0.095	0.148	0.299
目標を立てて計画的に行動する力	0.228	0.213	0.262
広い視野から人間を研究する力	0.179	0.197	0.242

が学生の成長感を高めることを示すものであった。「入学前学習姿勢」→「授業取組み」→「卒業論文取組み」→「成長感」とつながるパス係数の値が比較的大きいことに表れているように、入り口では学士課程教育への準備ができた学生を入学させ、卒業論文執筆に向けて授業等でしっかりと鍛え、最終学年でも気を抜かないように意欲的に卒業論文に取り組ませるといふ、学士課程教育の一連のプロセスが機能することの重要性と、そのなかで卒業論文の果たす役割が改めて示されたといえよう。ほとんど自明視されあまり検証されていない卒業論文の効果の一端について、教育の受け手である学生の評価に基づき検証した点に一定の意義があると考えられる。

ただし、本稿はあくまで事例となった文学部の学生の自己評価に基づく検証であり、人文科学系の卒業論文一般の有効性まで主張するものではない。また、卒業論文さえ頑張れば学生は十分に成長すると主張するものでもない。可能であれば客観的な指標を用いた検証も交えつつ、実際に教育に携わった教員による検討や、卒業生に対する調査等を通じて、卒業論文の効果を具体的に特定していくことなどが今後の課題である。

注

- ・1 カレッジ・インパクトの研究において、たとえば初年次教育に関する研究では山田(2012)が、学生のエンゲージメントに関する研究では小方(2008)が存在する。
- ・2 たとえば、工学系の学士課程教育については矢野(2005)が、大学院教育については濱中(2009)が挙げられる。
- ・3 たとえば、教科書に関する研究のなかでは、浦田(1987)が文系分野の標準化の程度が低いことを指摘している。
- ・4 本調査についての詳細は学習院大学人文科学研究共同研究プロジェクトのウェブサイト(http://www.gakushuin.ac.jp/univ/let/rihum/project_kanda.html)を参照されたい。なお、本稿における大学名の明示および調査データの使用に関しては、プロジェクトメンバーの事前了承を得ている。ただし、本稿の内容は学習院大学文学部の公式見解ではなく、仮に誤謬等があった場合もその責任は筆者個人にある。
- ・5 特定のテーマについて調査して相当量の論理的な文章を執筆するという意味で、卒業論文と卒業研究はほぼ同様のものととらえ、本稿における表記は「卒業論文」に統一した。
なお、学習院大学文学部の卒業論文は12単位(または卒業研究4単位と卒業研究〔指導〕演習8単位)に相当する。学科によって多少異なるが、3年次からのゼミ参加や中間発表が課されるなど、教員の指導のもとでしっかりと取り組む体制がとられている。
- ・6 本調査でいう「授業」には、予習・復習も含まれている(質問紙にそのように明記)。
- ・7 本稿では合成変数を作成する前の個別の変数の組合せについて逐一紹介できないので、データの特性等も考慮し、各構成概念に対応する合成変数を用

いた。ただし、入学前学習姿勢については、事前に検討した合成変数の信頼性係数の低さや、単独でモデルに投入した場合の他の変数との相関が試作した合成変数よりも高めだったことなどを考慮し、高校時代の学習経験に対する設問「授業でわからなかったところは自分で考えたり調べたりした」への回答(4件法)をそのまま使用した。

授業取組みには、予習・復習も含めた「基礎教養科目」「自学科の専門講義」「自学科の専門演習」への取組み度合を尋ねた回答(4件法)の合計値を用いた。経験しなかった者の多い他学科の授業や、外国文学系の学科では意味合いが異なる可能性がある外国語の授業などは考慮していない。

卒業論文取組みには、どの程度「卒論・卒研の執筆に真剣に取り組んだ」のかと、執筆に際し「問題設定の適切性」「先行研究をきちんとふまえること」「引用の仕方、文献表の作り方」「一次データ(原典、資料も含む)の利用」「独創性」「論理的な文章構成」「文章の分かりやすさ」にどの程度注意したかを尋ねた質問への回答(4件法)の合計値を用いた。

成長感には、「専門分野の知識」「専門分野以外の幅広い知識」「常識にとらわれることなく批判的に考える力」「他者と協力してものごとを進める力」「自分の考えを他者に文章で伝える力」「自分の考えを他者に口頭で伝える力」「自分の適性や能力を把握する力」「目標を立てて計画的に行動する力」「広い視野から人間を研究する力」がどの程度身についたかという自己評価(4件法)の合計値を用いた。

以上はいずれも、回答時点(卒業直前)で学生が回答する回顧型の質問である。なお、各合成変数の内訳である変数同士には、ごく一部の組合せを除き、互いに統計的に有意な正の相関があることを確認している。

- ・8 本来であれば、人文科学系の卒業論文の検証を行うためには、その他の学問分野における卒業論文の執筆経験の有無についても統制できるデータとモデルを用いるべきと考えられる。しかしながら、仮にそのようなデータを用いて卒業論文の執筆経験の有無によるグループ分けができたとしても、グループ間の差異は入学者の学力やカリキュラム全体の違い等の卒業論文以外の要因を反映したものである可能性が高い。たとえば、卒業論文執筆にあたり指導教員の事前承諾が必要な場合、執筆経験の有無は、実際には学生の何らかの能力的な差異を意味しているおそれがある。したがって、1回限りの横断面調査に基づき、執筆経験の有無から卒業論文の効果を検証することは現実的ではない。そのため本稿では、厳密な意味で卒業論文の効果の検証とは言い難いものの、あえて文学部の卒業論文を執筆した学生だけを対象とし、その取組み方の違いに着目して分析を行った。

- ・9 パス解析に用いたこれら4つの変数間の相関係数はいずれも0.1%水準で有意な正の値だった。前述のように本調査は実質的に悉皆調査であり、統計的仮説検定は必要ないともいえるが、本稿では参考までに検定結果も記している。

- ・10 私の所属する研究グループでは、類似した調査設計のもとで、学習院大学文学部を卒業後10年前後が経過した卒業生を対象とする質問紙調査を別途実施している。本稿が示した知見の妥当性の確認も含め、卒業生調査を用いた実証研究を今後進める予定である。詳細については、上述の学習院大学人文科学研究所共同研究プロジェクトのウェブサイト参照されたい。

文献

中央教育審議会, 2008, 「学士課程教育の構築に向けて(答申)」。

濱中淳子, 2009, 『大学院改革の社会学——工学系の教育機能を検証する』東洋館出版社。

小方直幸, 2008, 「学生のエンゲージメントと大学教育のアウトカム」『高等教育研究』11: 45-64。

浦田広明, 1987, 「大学教科書の問題」片岡徳雄編著『教科書の社会学的研究』福村出版, 204-21。

山田礼子, 2012, 『学士課程教育の質保証へむけて——学生調査と初年次教育からみえてきたもの』東信堂。

矢野真和, 2005, 『工学教育のレリバンズ』平成14~16年度文部科学省科学研究費補助基金基盤研究(B)研究成果報告書。

